

77人の 舞台裏

挑戦の始まり

1月19日、町民文化会館コミュニティホールに、ミュージカル「アラジンと魔法のランプ」の練習のため、町の小学生たちが集合しました。参加希望者は、平内小64人、角浜小7人、宿戸小3人、大野小2人、種市小1人の計77人。本番の2月22日までの約1カ月で、練習はわずか6回。限られた練習期間の中、77人の挑戦は始まりました。

児童たちの配役は、1年生から4年生までが「町の市場の子どもたち」と「ランプの精の子どもたち」で、5年生と6年生が「ジャスミン王宮の衛兵たち」。本格的な振り付けの指導を受けるのは、ほとんどの児童が初めてです。しかし、全員で準備体操を終えると、ビデオなどで予習していた配役ごとの出演シーンを早速ステージ上で開始。初日から熱の

ず生まれつきの素質を持った子が何人かいるんです。前回(※)も今回も、洋野町にはそういう子どもたちがいますね」と目を細めました。

いざ、本番へ

本番の数日前、町からの出演者の大半を占める平内小でインフルエンザが流行し、13人が出演できなくなっていました。本番当日の午前中に行われた最終リハーサルでは、休んだ児童の分を劇団メンバーがカバーしてくれました。また、当日は児童の家族や劇団メンバーのほかに30人を超える劇団の支援スタッフが滝沢村などから駆け付け、公演を舞台裏から支えてくれました。

迎えた本番15分前、コミュニティホールには出演者が集合。劇中での児童たちのせりふである、「ジャック隊長、万歳！」を全員で連呼して気持ちを高め、本番のステージに臨みました。

終演後の笑顔

観客を見送るエントランスに何度も響く、「ありがとうございまして！」という元気な声。満面の笑顔には、児童たちの充実感が表れてい



1 本番 15分前、せりふを連呼してステージへの気持ちを高める出演者たち
2 本番直前、劇団のメンバーにメイクをしてもらう児童
3 劇団ゆうの子ども組の子たちと記念撮影。またいつか会えるといいね
4 忘れてはいけないスタッフの皆さん。本当にお疲れ様でした



1 お母さんたちが見守る中、準備運動から始まった初練習 (1/19)
2 中には、最初からこんなに体がやわらかい子もいました (1/19)
3 腕を曲げる角度や顔の向きまで、丁寧な指導が一人ひとりに (2/14)
4 ステージでの練習も4回目。だんだん腕の角度がそろってきました (2/14)

こもった練習になりました。2回目の練習日となった1月31日は、児童たちと同じシーンを演じる劇団ゆうの「子ども組」との初顔合わせの日。準備体操や衣装合わせのあと、全体の流れや一人ひとりが動く位置、順番などを劇団メンバーと一緒に確認。あいにくの大雪のために開始時間が遅れ、予定していた交流の時間は取れませんでした。同年代の共演者たちは、ステージ上でも汗を流しました。

指導者の目線

3回目以降の練習は、出演シーンを何度も繰り返しながら、腕の角度や舞台に出るタイミングなど、細かいところに気を付けて踊りを合わせていく作業。このころになると児童たちはだいぶ打ち解け、待ち時間に学校の違う児童が談笑する姿も見られ、踊りも少しずつ揃ってきました。

練習を見守ってきた劇団ゆう理事長の菊田第一さんは、4回の練習を終え、「子どもたちは、練習期間が短くても、本番でびっくりするような力を出すことがあるんです」と児童たちの成長に期待を込めます。「県内外でたくさん子どもたちを指導してきましたが、どこに行っても必

関係者の目線

今回の公演には、前回出演した児童や、「ひろの演劇ワークショップ」のメンバーも練習に参加しました。演劇部に所属していた経験を生かし、ボランティアで練習の手伝いをしたワークショップメンバーの鈴木実千代さん(二区)は、「送迎するお母さんたちにも、3回目、4回目と経験すれば興味を持ってもらえるかもしれません」と話します。

ミュージカルやワークショップなどを担当する町教育委員会生涯学習課の梅澤幸生(社会教育係長)は、「子どもたちは、楽しみながら舞台に親しんでくれたようです。これらの活動を続けていくことで大人にも興味を持ってもらい、子どもたちと一緒に活動してもらえばいいですね」と、公演の手応えと今後の展望を話します。

※町の児童が劇団ゆうから演技指導を受けるのは、今回が2回目。1回目は、平成18年7月に町民文化会館で行われたミュージカル「ピーター・パン」のため、種市小を中心に135人の児童が指導を受けた